

## 街の公共空間を文化発信の場へ

### — ニューヨーク：官民の協働パワー —

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

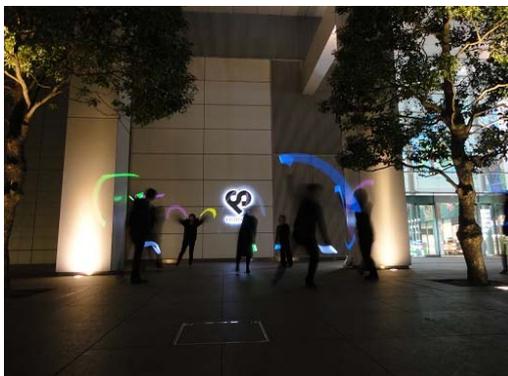
代表理事 工藤安代

#### NPO 法人アート&ソサイエティ研究センターの活動

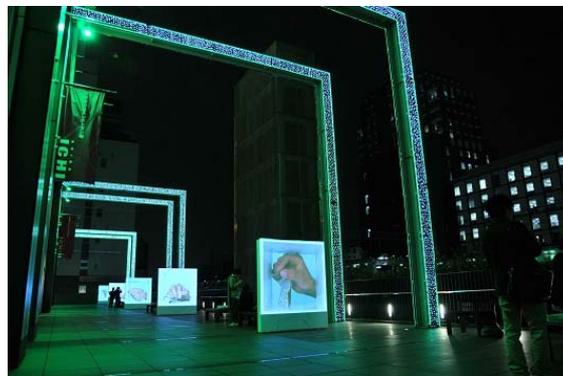
近年、アートを街づくりに活用しようという動きが活発化している。アートイベントにより地域活性化をはかったり、アーティストが地域に滞在することで街を若返らせようとする事業が頻繁に行なわれ、アートの創造性が地域社会再生に役立つものとして着目されている。

私が代表を務める特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センターでも都市の公共的な空間を使って、アートイベントを実施してきた。弊法人は社会・地域における芸術文化活動が今日の社会をより豊かにする力をもつと考え、アートと社会の新たな関係づくりを目的として 2009 年より活動をはじめた。以降、研究会や講演会の開催や、機関紙『Public Art Magazine』の発行、全国のアート・プロジェクト資料を収集・アーカイブ化する事業を東京都と共同でおこなってきた。

‘10 年からは、近年都市圏に整備されてきた「公開空地」を対象としてアートイベントをはじめ、パフォーマンスや映像プロジェクション、ワークショップなど市民を巻き込んだプロジェクトを企画運営している。公開空地は周辺住民や歩行者が利用できるように開放されているが（東京都千代田区、港区、中央区内だけでも 230 カ所以上）、その存在はほとんど人びとに知られることなく、通行やベンチでの休憩など、その利活用は限定的な状況にある。都市の貴重なオープンスペースであるこの空間をもっと文化的に活用できないか？人びとが気軽に現代アートを楽しめ、若手アーティストの発表の場にできないか？そういった思いから毎年「公開空地プロジェクト」を開催している。



2010年「公開空地@Afternoon→Night」  
秋葉原富士ソフト公開空地にて参加型パフォーマンス  
協力：社団法人日本オーディオ協会  
富士ソフトアキバプラザ



2011年「公開空地アートプロジェクト—CHIYODAをベースとした創造と発信」  
秋葉原UDX公開空地にて映像プロジェクション  
アーティスト：瀧健太郎  
助成：東京都千代田区



2012年「ニコニコ来来ドーム」  
お茶の水三井住友海上公開空地  
参加型ワークショップ アーティスト：志喜屋徹



2013年「ART×公開空地 都市に介入するアート・コンペティション」  
新御茶ノ水ビル公開空地にて2月極寒での5日間パフォーマンス  
アーティスト：関川航平、栗原千亜紀 助成：東京都千代田区



2015年2月「Heart Light Go-round」  
お茶の水サンクレール公開空地、メッセージを結ぶ参加型作品  
アーティスト：志喜屋徹、新井敦夫、高木潤  
協賛：日本出版販売株式会社



2015年5月に同作品は、地域の企業などの協力により、  
東京神田明神に奉納され、永久設置された。

## ニューヨーク 文化が力強い経済的エンジンとなる街

現在、世界の大都市では公共空間をアーティストの発表の場として活用するケースが多くみられる。テンポラリー（期間限定）、パーマナント（恒久的）な作品展示により、街の文化性を積極的に“見える化”しようと試みているのだ。なかでも文化的先鋭都市であるニューヨークは、そのプログラムの多様性で群を抜いているといえるだろう。

メトロポリタン美術館や近代美術館（MOMA）をはじめとした世界屈指の美術館が軒を連ね、グローバル・ビジネスを展開する名立たる現代アートギャラリーも必ずNYには拠点を置く。オフィスビルのエントランスロビーには、著名・新進アーティストの作品が飾られ、アートオークションで動く金額も桁はずれだ。これだけでニューヨークはまさに“アートに溢れた街”というに十分だが、この街のユニークなところは公共空間とアートの関係である。民間からのパワーを取り込み、行政主導による芸術施策だけでなく多様なプログラムを実施している。運営組織のタテ割り構造を越えて、行政と民間が一体となってアートを常に楽しめる都市環境づくりが工夫されているのである。

人口が約849万人（2014年）のNY市だが、2013年の観光客数は5,430万人（海外観光客1,140万人）になり、総額38.8億ドルを出費したという。ちなみに観光客数の1位がイギリスで日本は10位<sup>i</sup>。美術館・博物館・ミュージカルなど文化芸術分野が観光の割合として高順位となり、まさに文化が街

の力強い経済のエンジンとなっている。

### 住民の生活空間にとけ込むアート

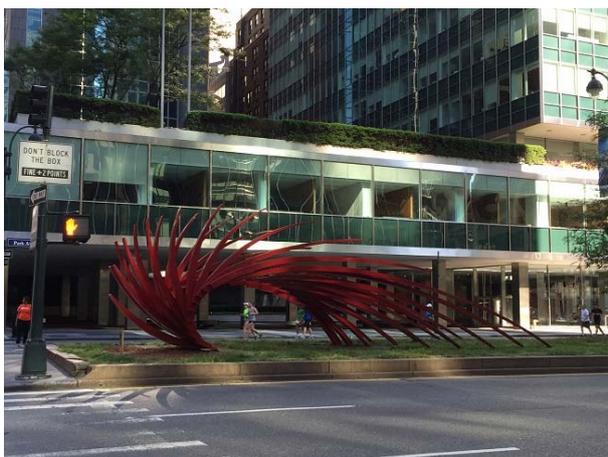
NYを訪れるときは時差のため朝早くから活動し、早起きのオフィスワーカーたちと共に街を歩く。美術館やギャラリーがまだ開いていない時間帯でも、街なかのアートを見学することで十分刺激的な時間を過ごせるのだ。

この夏、休日の朝ホテルから出ると、いつもは車が忙しく行きかうパークアベニューが、マラソンやサイクリングをする人びとで溢れていた。『サマー・ストリート』というイベントで、マンハッタンの約11キロにわたる車道を8月の毎土曜日に市民に開放するものだ。去年は30万人もが参加したらしい。運営の費用は行政と企業協賛でまかなっているという。

暑い夏の休日、車道をパブリック・スペースとして楽しむニュー Yorker たちの風景の背後に彫刻作品が並ぶ。赤い鶏冠のような立体がアベニューの中央分離帯に点々と続いている。これは『テンポラリー・パブリック・スカulptチャー』というプログラムで、パークアベニュー基金とNY市の公園&レクリエーション課により1999年から開始された。著名な彫刻家の作品を2~4ヶ月にわたり展示する。‘10年には、国際的に活躍する奈良美智の人気作品も展示された。今回は、世界貿易センター跡地の地下鉄駅を設計したスペインの建築家サンティアゴ・カラトラバが選ばれ、彼の建築的ボキャブラリーが彫刻となってシャープな造形美を放っていた。



パークアベニューでの『サマー・ストリート』の様子



パークアベニュー中央分離帯  
サンティアゴ・カラトラバによる一連の彫刻作品  
《Calatrava on Park Avenue》  
2015年6/8-11/1パークアベニュー基金、マルボロ・ギャラリー主催

### 公開空地(Privately owned public space)の文化的有効活用

民間の所有地でありながら、公共空間として開放する公開空地は、日本でも数多く整備されている。米国では1961年に公開空地の歴史がはじまっており、アート作品も取り入れられている。通行の妨

げになる物体は設置を不可とする日本での制度と異なる点である。

‘07年、NY市都市計画課は公開空地の設計と運営手法の改訂を行なった。追加のアメニティ条項として、465㎡以上の面積では多様なデザイン性をさらに加えることが謳われた。たとえば移動式テーブルやイス、噴水や池などの水デザイン、子どもの遊び場、ゲーム用テーブル、オープンカフェやキオスクなどのフードサービスがあり、それに加えアート作品の導入も推進されたのだ。そして約930㎡以上及び商業ビルの場合、3つ以上のアメニティを整備する必要を謳い、これによりアートを取り入れるインセンティブが高くなった<sup>ii</sup>。

公開空地の利活用を改善することを目指すNYの民間団体「Advocates for Privately Owned Public Space」は、市内525か所の公開空地を調査し、そのデータをウェブサイトで公開している。テンポラリーや恒久的なアート作品が数か所の公開空地に取り入れられている。

NYの公開空地で最も知られている場所は、ミス・ファン・デル・ローエが設計した歴史的建築「シーグラムビル」(1958年)の前庭だろう。パークアベニューから大きくセットバックさせて作ったこの“プラザ”は、開発当時、実験的な試みであったが、都市のオープンスペースとして市民から評判となり、開発者にインセンティブを与える公開空地の発想を生み出し、その後のビル開発に大きな影響を与えた。

「シーグラムプラザ」は、斬新なアートを展示するスペースとしてもユニークな役割を担ってきた。訪ねた時には、粘土を無造作に重ねたような巨大彫刻があったが、今や世界一位の実力を誇るガゴシアン・ギャラリーがこの展示をサポートしていたことに驚いた。高額の彫刻作品を公共空間にポンと展示してしまうアートビジネスの力を、上手に活用するNYの文化システムの洗練性を実感した。

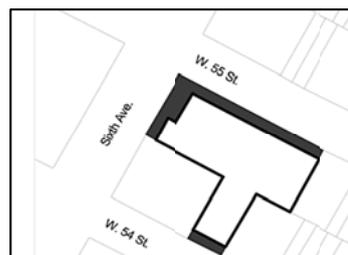
公開空地での民間による文化事業は、もちろん観光客にも恩恵を与えている。6番街55丁目、角の小さな空間にロバート・インディアナ作《LOVE》がある。NY的記念写真が撮れるため家族連れやカップルなどでいつも賑わう人気のスポットだ。



シーグラムプラザパークアベニュー-53丁目  
ウスル・フィッシャー《Big Cray #4》  
2015.5/11-9/1



6番街55丁目  
ロバート・インディアナ《LOVE》1965.



6番街55丁目の公開空地  
(1966年整備)  
設計: Emery Roth & Sons  
©Advocates for Privately Owned Public Space

## 都市公園とアート：NY 公園課による『アート・イン・ザ・パークス(Art in the Parks)』プログラム

ニューヨークは1982年「アートのための1%」法を取り入れ、市内5区における公立教育施設、市の公共建築などにアートを導入する歴史がある。「公共空間にアートを展示し、市民だれもが鑑賞できる機会をつくる」という考えの元で開始された。首都交通公社(The Metropolitan Transit Authority)も「1%」法を導入し、市交通局では‘08年になり「DOT ART」というプログラムをはじめた。紙面の関係で紹介できないが、広場、フェンス、橋梁、街路など都市インフラデザインをアートで飾る住民参加型の興味深いプログラムだ。

現在、こうした行政や公的機関の取り組みは世界各国の自治体で採用されているが、NY市は行政の縦割りを超え、群を抜いてユニークな試みをおこなっている。ちなみに市の文化予算をみると‘13年度のNY市文化局は187億円(\$1=120円)で、44.8億円がプログラム費にあたり<sup>iii</sup>、NYほどの大都市としては文化予算が少ないことに驚く。実は民間の力が大きく、活発な寄付金が街での多様な文化プログラムを支えているのだ。

NY市公園&レクリエーション課が主導するプログラム『アート・イン・ザ・パークス』は、市内公園に一年未満(通常、3~6ヶ月)アートを展示するというものだ。その歴史は長く、1967年に開始されて以来、すでに1,000点を超える国際・新人アーティストの作品を展示してきた。ちなみに先述のパークアベニューでの展示もこの一環だった。

NY市内にある公園ならどこでも対象となり、これまで1/10の公園において実施されている。市の方針によると、単に公園を美的にしたり、活気づけたりするだけでなく、社会的交流をもたらすアーティストックなプロジェクトが求められるという。そして『アート・イン・ザ・パークス』もさまざまな民間セクターが協働して実施されている。

### ❖ マディソン・スクエア公園

なかでもミッドタウンにあるマディソン・スクエア公園での「<sup>マッド スクエア アート</sup>MAD. S Q. ART」は、プログラムのクオリティが高く、年間通して国際的に著名であったり、新進気鋭なアーティストに作品を依頼している。NYを訪れた時には「今度は何んな面白いものが見れるか」ワクワクする場所の一つだ。

今ではニュー Yorker に愛されるこの公園だが、実はNYの公園の歴史を体現するように、ひと昔前には麻薬と犯罪がはびこる人が近寄りたがらない場所だった。公園再生のキャンペーンなど、地元の人びとの努力の積み重ねが報われ、週末には無料コンサートなどで親子づれも楽しみ、愛される公園に再生した。公園の管理は民間の管理団体が行政と協働し、公園の衛生や安全管理だけでなく、文化行事にも力を入れている。プログラム費は、ニューヨーク文化部門から公的サポートを受けている他に、民間企業や財団、基金、個人からの寄付により賄っている。



マディソン・スクエア公園  
テレジア・フェルナンデス《曇気楼 Fata Morgana》  
2015年6月1日-2016年冬



マディソン・スクエア公園の中にある人気のハンバーガー店  
「Shake Shack」の前はいつも人で溢れている

### ❖ トライベッカ公園

マンハッタンの方角にあるトライベッカ公園もお気に入りの場所だ。ポケットパーク的な小さな公園だが、こんな規模でも『アート・イン・ザ・パークス』プログラムは実施されている。ゴロリと落ちたような人の頭を模した不思議な作品や黒いビニール製ゴミ袋のぬいぐるみのような作品など、ユニークなアートを見るに事欠かない空間だ。

このプログラムのもとで、国際的な注目を集めるようなプロジェクトもつくられた。国際的活躍がめざましい西野達による《Discovering Columbus》(2012年)もその一つだ。セントラルパークの脇の「コロンブス像」を囲む仮設リビングルームを出現させ、前NY市長であり、“現代のメディチ”としてアートを擁護するブルームバーグも訪れるほど人気を得たプロジェクトとなった。

こうしたプロジェクトは、地域NPOなど芸術団体やアーティストとの協働で実現する。作品出展のための資金集め(設置費用や保険、現状復帰費用など)は協働側にとってかなりの負担となるが、それでも大型作品を公の場で発表できる魅力は大きいし、広報効果も計り知れない。トライベッカ公園で作品を展示したニコラス・ホリバーは「ニューヨークの公園で作品を展示することは、街の環境が彫刻にどのように影響するかを観察する格好のチャンスだ」と展示する思いを語っている<sup>iv</sup>。



トライベッカ公園  
ニコラス・ホリバー《Head of Goliath》2015.5/4-9/15  
街から出た端材や再利用物が組み合わせられ、展示期間に劣化し分解されていく。



コロンバス・サークル 西野達《DiscoveringColumbus》 2012.9/20-12/2  
 Photo <左> Jesse Hamerman <右> Tom Powel Imaging ©Public Art Fund

### 今後の都市におけるアートの展開は？

NYの街が“アートで溢れる”仕掛けとして、やはり公共空間とアートの関係が見逃せない。世界でも一番刺激が多いこの街で、点在する大小規模の公園や公開空地を活用し、実験的なアートを展示する努力と工夫を凝らしているのだ。行政主導の芸術プログラムに民間が協働していく手法や、規制緩和や制度設計が大きなポイントとなる。

思い出すが、イーストリバー4ヵ所に人口の滝を出現させた2008年の《ニューヨーク・シティの滝》だ。制作費が約1550万ドルかかったことにも驚くが、どれだけの管轄分野の調整が必要だったか想像するだけで気が遠くなる。その甲斐あってか、このプロジェクトは世界の注目を集めることにも成功し、滝見学のウォーター・ツアーが組まれたり、夜間美しくライトアップされて約4ヶ月人びとを楽しませる華やかなイベントとなった。その経済効果は5500万ドルとも報告されている。一方、華やかさに隠れてしまうような地道な工夫もなされた。非営利芸術団体と行政の教育機関などが協働して、《滝》を鑑賞するためのユニークな「ガイドブック」が開発された。さまざまな層が楽しめるよう、幼稚園から高校生の教員用の冊子もつくられた。

こうした大胆な施策は、アートが公共の公益に資するものとして扱われているからこそ実行できるのだろう。日本ではアートを「教養」や「お稽古事」として特別な人が楽しむものと捉えがちだが、NYはアートを街の成長のための「促進剤」として捉えているのだ。一つには観光客などの訪問者向けの文化的アピールであり、目に見える経済的効果につながる。もう一つには街の住民への文化的サービスであり、高齢者や子ども、学生といったマルチ世代に文化的環境を提供し、感性的な刺激や楽



イーストリバー（ブルックリンブリッジ）  
 オラファー・エリアソン《The New York City Waterfalls》  
 2008年6月26日-10月13日  
 高さは約10階建てであり、川の水を汲み上げる循環方式をつくり、  
 電力は100%グリーンパワー

こうした大胆な施策は、アートが公共の公益に資するものとして扱われているからこそ実行できるのだろう。日本ではアートを「教養」や「お稽古事」として特別な人が楽しむものと捉えがちだが、NYはアートを街の成長のための「促進剤」として捉えているのだ。一つには観光客などの訪問者向けの文化的アピールであり、目に見える経済的効果につながる。もう一つには街の住民への文化的サービスであり、高齢者や子ども、学生といったマルチ世代に文化的環境を提供し、感性的な刺激や楽

しみといった心理面のサポートをしている。

クリエイティブな働き手や観光客を惹きつける場所として、そして創造的イノベーションを起こし、文化的対話を通して市民をエンパワメントするためには、都市の公共空間をいかに魅力溢れるものに変えていくかが重要な課題となる。街でのアートを公民の両セクターでまるごと活用する手法に学ぶべきものは多いのではないだろうか。

---

#### ■筆者略歴

東京生まれ。南カルフォルニア大学大学院、埼玉大学大学院文化科学研究科博士後期課程を修了。民間会社にてパブリックアート事業のディレクションに携わった後、2009年特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センターを設立。社会・地域における芸術文化活動の情報発信・調査研究・実践活動に取り組む。国内外のアート活動を紹介する『Public Art Magazine』誌の発行、レクチャーやシンポジウムの開催、東京文化発信プロジェクト室(現アーツカウンシル東京)との共催事業『P+ARCHIVE』<sup>ピー＋アーカイブ</sup>を行なう。主な著作『パブリックアート政策』、翻訳『ソーシャリー・エンゲイジド・アート入門』がある。2015年度環境芸術学会学会賞受賞。日本女子大学・実践女子大学非常勤講師。

URL : <http://www.art-society.com>

---

発行元・問合せ先 公益財団法人都市活力研究所  
〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号  
グランフロント大阪 ナレッジキャピタル タワーC 7F  
TEL 06-6359-1322/FAX 06-6359-1329

#### 【参照】

- ・サマー・ストリート  
〈<http://www.nyc.gov/html/dot/summerstreets/html/about/about.shtml>〉
- ・パークアベニュー基金  
〈<http://www.fundforparkavenue.org/fund-for-park-avenue-sculpture.htm>〉
- ・Advocates for Privately Owned Public Space 〈<http://apops.mas.org/>〉
- ・『アート・イン・ザ・パークス』 〈<http://www.nycgovparks.org/art>〉
- ・マディソン・スクエア公園「MAD. SQ. ART」 〈<http://www.madisonsquarepark.org/art>〉  
(Website はすべて 2015 月 10 日 30 日閲覧)

---

i The Official Guide nycgo.com, NYC Statistics

〈<http://www.nycgo.com/articles/nyc-statistics-page>〉

ii NYC Planning, Department of City planning, City Planning Commission

〈[http://www.nyc.gov/html/dcp/html/pops/pops\\_2007\\_ta.shtml](http://www.nyc.gov/html/dcp/html/pops/pops_2007_ta.shtml)〉

iii The Council of The City of New York, Hearing on The Fiscal Year 2014 Executive Budget for The Department of Cultural Affairs, June 3, 2013

〈<http://council.nyc.gov/downloads/pdf/budget/2014/execbudget/126CulturalAffairs.pdf>〉

iv Sarah Cascone, "Nicolas Holiber's Colossal Head of Goliath Unveiled in Tribeca Park," 2015, 5, 6. Artnet news

〈<https://news.artnet.com/art-world/nicolas-holiber-head-of-goliath-295070>〉